

平成 28 年度美原賞顕彰金受賞講演抄録

「脳卒中データバンクおよび脳ドックの構築による脳卒中の予防、治療への貢献」

島根大学名誉教授・同医学部特任教授、耕雲堂小林病院名誉院長

小林祥泰

脳卒中データバンク構築

厚生省健康 21 政策諮問委員会委員に任命された 1998 年、日本では脳卒中に関する大規模臨床データやエビデンスが殆どないことを実感し、翌年に厚生省厚生科研班研究を立ち上げ、病院独自でも活用出来る日本初のコンピュータベースで世界標準準拠の全国版脳卒中データベースを開発した。その後、全国の脳卒中中核病院の参加を得て、2013 年には 11 万例以上のビッグデータを集積し、世界でも有数の脳卒中データバンクを構築した。参加施設の担当者を執筆者とした「脳卒中データバンク」シリーズは、日本唯一最大の脳卒中データブックとして評価されている。2015 年度から国立循環器病研究センターに運営移管したので、今後は我が国の脳卒中医療政策にも貢献出来ることを期待している。

脳ドック構築

1982 年から脳循環、脳機能に及ぼす社会的環境因子の影響をみるコホート研究を開始、長期追跡調査を行った。1987 年に MRI を導入し検査したところ無症候性脳梗塞が 30% 近くに見つかったことから MRI は脳卒中予防に有用と考え、1988 年に日本初の MRI による脳ドックを開設し、無症候性脳梗塞の頻度、危険因子、脳血流等を報告した。さらに継続的な予後調査で、無症候性脳血管障害が脳卒中発症の予知因子であることを世界で初めて前向き研究で検証し報告した。また、認知症の超早期発見に取組み、高次機能検査、事象関連電位、SDS、やる気スコア (apathy scale 島根医大版) を早期から採用、さらに Wisconsin card sorting test を半自動化した PC 版を開発、現在全国標準として普及している。脳ドック学会ではガイドライン改定委員長としてレベルアップを主導してきた。現在も後任の山口教授が無症候性脳血管障害の追跡調査研究を継続、微小脳出血が脳出血だけでなく脳梗塞のリスクでもあることを報告し、さらに小野田と安静時脳機能的 MRI (rfMRI) による脳ネットワーク機能が認知症評価に有用であること、また抑うつ状態とアパシーの機能画像診断が rfMRI で鑑別可能なことを世界で初めて報告している。また現在、山口教授と共に、革新的研究開発推

進プログラム（**ImPACT**）の「脳情報の可視化と制御による活力溢れる生活の実現」部門の中で脳ドックを活用した rfMRI 等のビッグデータ解析研究に取り組んでいる。急速な超高齢社会が到来した現在、認知症の予防を含めた健康寿命の延長が一億総活躍時代達成の喫緊の課題であり、さらに広範な脳機能を可視化出来る次世代脳ドックの開発に向けて研究を進めていきたいと考えている。